

R8 校内研究通信タイトルに寄せて

研究2年次を迎えました。今年度もこの研究通信は「不定期発行」です。また、先生方の素晴らしい授業を直接評価するものではなく、あくまで「研究主任としての私見」を述べる場であることを最初にお断りしておきます。(ですので、授業の文脈から離れた内容を発信することも多々あります)

さて、昨年度の「守」を経て、本年度の通信テーマは「破」です。R7研究紀要を概観し、「破」によせて述べるならば、「平均的な正解を、自らの主観と経験をもって破る」「知識の状態を、学びの動きで破る」「予定調和の授業を、伴走で破る」といったことが挙げられるでしょうか。AIが答えを出す時代だからこそ、子供の「情動のわきおこり」や「認知のゆらぎ」といった、ある種人間臭い(?)学びのプロセスを、学びの伴走者として共に紡いでいきたいと考えています。

来週は新任附属教員とともに学ぶ授業研究会です(略して「ともに学ぶ授業研」)

もともとは「新任教員に学ぶ授業研究会」という名称でしたが、「新任教員とともに学ぶ……」への変更を経て、教官呼称の廃止に伴い、さらに長い名称になってしまいました。そこで、今後は(今回は?)「ともに学ぶ授業研」という略称でいきたいと思えます。

ともに学ぶ授業研のねらいは、新任附属教員の新鮮な授業づくりから学び、目の前の子供の姿から授業を多角的に分析する視点や、研究会での議論の作法を深めることにあります。何事も「例年通りだからやる」のではなく、「なぜやるのか」という目的を問い直すことが、研究においても大切だと考えています。

ここで大切にしたいのは、「いかなる実践も、必ず成果と課題がある」という視点です。これは私がかつて先輩から教わった言葉ですが、どんな授業にも必ず良い点と改善点があります。たとえ授業者自身が「うまくいかなかった」と感じていても、ある子供にとっては、実はとても深い学びがあったということもあります。(もちろん、その逆も然りです。)

ですから、この研究会を単なる「方法の引き出し」を増やす場としてではなく、「教師としての見方・考え方」を広げる場と捉えたいのです。

本校の研究は、定量的なデータ分析よりも、子供の姿を「質的」に捉えることを重視しています。それは、目の前の子供の学びの様相を、その先生ならではの「まなざし」で深く見つめることから始まります。同じ子供を追っていても、先生によって捉える学びの姿は異なりますが、この「一般化されない独自のまなざし」こそが、子供を多面的に育てる教育の本質であると思っています。

まずは、私たちは「実は子供の学びの多くを見落としている」という謙虚な前提に立ちましょう。その上で、子供が学ぶ姿の美しさを素直に感じ取れるようになること。それが、日々子供に伴走し、成長できる教師への第一歩になると信じています。

(木村 仁)